

岩手郡医報

昭和56年 8月 - No. 4 -

編集／発行

岩手郡医師会



東楽寺の十一面観音

写真の十一面観音像は、昔盛岡の仁王にあったものを南部藩が盛岡の街を整理した時に仁王像とともに玉山に移され、さらに明治の頃当時の観音堂で一時風雨にさらされていました。その後現在の東楽寺に移され、昭和48年には六角形の収蔵庫が完成し、十一面観音像7体、仁王像2体の県指定有形文化財が保存されており、これ等の仏像は制作年代、作風が異なっているが、いずれも平安期の作で県内でも最古の仏像の部類に属しているとされています。

このほかにも村内には、山谷川目、日戸等に十一面観音像、川又に不動明王があり、これだけの仏像を所有しているのは岩手県中央部では玉山村だけで、姫神山を中心とする本村では、古代文化の先進地であったと思われます。また村内には数多くの館も残されており、このように本村に仏像、城跡文化を形成させたのは、蝦夷征伐とともに、北上川をさかのぼってきた仏教文化が定着したのと、姫神山麓からの金の産出があげられます。

(秋浜)

佐々木会長逝去せらる

県医師会長佐々木一夫先生には7月4日午後6時30分急性心不全にて逝去せられました。惜みてもあまりあり謹んで哀悼の意を表します。佐々木会長には昭和22年新制医師会設立以来県医師会にありては長年副会長並びに現在迄会長として幾多の功績を残されました。特に会員の医の倫理の確立に努力せられ、又県医師会長年の懸案でありました岩手県医師会史上下巻の発刊、医師会館の建設、岩医厚

生株式会社の設立、岩手県予防医学協会の設立等幾多の事業を成し遂げられ県医師会不動の基礎を築かれました。又日本医師会の理事、監事として勤務されましたことは皆様既に御承知の通りであります。その他、県議会議員として、又体育関係、教育関係に幾多の輝しい業績を残されました。

茲に謹んで御冥福を御祈り申し上げます。
葬儀の詳細は行事関係に記してあります。

行 事 関 係 報 告

1 県医師会関係

- (イ) 元県医師会長佐藤隆房先生には6月21日逝去せらる。
郡医師会より弔電を差上げる、又6月27日花巻文化会館に於て葬儀挙行せられ会長参列す。
 - (ロ) 6月18日県医師会全理事会開催、主として明19日の県医総会並びに県医学会春季総会について協議す。
 - (ハ) 6月19日の県医総会並び春季医学会に10名出席す。尚参加申し込みは当初16名なりしも6名の先生都合により欠席す。
 - (ニ) 6月22日元会長川上秀一郎先生逝去せらる。
郡医師会より弔電を差上げる。
 - (ホ) 県医師会長佐々木一夫先生には7月4日午後6時30分急性心不全のため急逝せらる惜しみてもあまりあり、謹んで哀悼の意を表します。
- 7月5日午前5時県医師会より会長急逝の電話あり、直に会員に連絡す。

7月6日午後故会長の火葬行なわれ会長、副会長、高橋牧、高橋寿先生参列す。

7月9日北上市市民会館に於て県医副会长岩動隆一氏葬儀委員長、和賀郡医師会会长石川和祐氏副委員長にて盛大に行なわる。当医師会より会長、副会長、理事、監事代議員、高橋牧、高橋寿先生参列す。郡医師会より花輪を差上げる。

- (ヘ) 7月12日県医師会主催、岩手郡医師会担当の海釣大会を釜石市唐丹湾に於て行なう。
- (ト) 7月22日県医師会館に於て盛岡市、岩手郡、紫波郡管内の医療機関に対し情報システムに関する説明会行なわる。
- (チ) 本年11月15日県医師会館に於て開催せらる北日本心臓病予防研究会の通知あり。

2 郡医師会関係

- (イ) 6月25日西根町平館高橋食堂に於て、救急告示病院に公的病院に対し情報システムの説明会を行なう。
- (ロ) 8月開催の県医師会野球大会の際の表彰選手を次の通り報告す。

記

10年選手 土谷邦彦先生

(イ) 7月12日県医師会主催当医師会担当の海釣大会は釜石市唐丹湾に於て盛大に行なわれその成績次の如し。

1位 紫波 川守田先生 6.0 kg

2位 医大 安井先生 5.3 kg

3位 岩手 宮杜 亨 4.3 kg

(二) 7月22日県医師会に於て開催の盛岡地区の情報システム会議に郡内関係機関より事務職員多数出席す。医師の出席なし。

(ホ) 7月25日産業医名簿発送さる。

特別寄稿

その事以前

山本忠壮

親愛措く能わざる岩手町一方井診療所長熊谷文五郎先生に、一文を求められ、身の程も顧みず、「その事以前」と題して書かしていただくことをお許し願います。

戦後特に、親子、夫婦、師弟、友人、その他諸々の人間関係に「話合い」とか「対話」とかいうことが高く呼ばれるようになりました。そのこと事態は、極めて必要且つ大事な事であるとは、筆者も心底深く銘記して止まないものであります。

しかし、より大事なことは、「対話の台」というものではないでしょうか。政治の台、教育の台、思想の台、生活の台というものではないでしょうか。終戦以来いかに「台なしの話し合い」「対話」台なしの政治、教育、思想、生活の氾濫に、国も家も個人も行き止まりになっているという感慨は、どなたも同様であると存じます。

風鈴や話をしても

しなくとも

話をしてもしなくとも、相互の間を流るる、人間的な、あたたかい、しみじみとした感懷、静かな安らぎ、時間と空間、自他を越えた一体感、そういうものが、「話合い」とか、「対話」とか、政治、教育、思想、生活の以前に、それらを統べて、括って一如一体な台としてなければならぬ事を痛感いたしております。

明治、大正、昭和を一貫して、日本のペスタ

ロッチャーと仰がれた、故芦田恵之助先生は、いみじくも教育以前の教育、教壇以前の教壇の方であられました。

先生一とたび教室のドアを開けらるるや、その瞬間に、被教育者の視、聴、言、動、思を、余すところなく捉えられ、そこに師弟一如の交流が電流のように流るる、あの風格、あの教力は、何処にその源流を汲出べきかを探ねる時、そこには主客の内面的一致を流るる生命その生命から迸り出する、和顔、愛語の教育の台が実在したからであったと回顧いたして居ります。

その上、吾が國に仏教が伝來したのは、仏教を信ずるという蘇我と、我が國には、昔から我が國の神がある、何ぞ異國の仏を信ずるか、という物部との二大対立があつて、遂に兵火を交えるに至り、その結果、仏教を信ずるというように理解されて参りましたが、「日本精神の哲学」で有名な、故鹿子木員信博士は、さにあらず第29代欽明天皇の詔に、「西の國の贈るところの仏像、相貌端嚴いかで礼拝せざるを得んや」を引用されて、仏教が日本に伝來したのは、仏像彫刻に籠もる、自ら成る美、即ちすべての調和が、日本の仏教を採用することになった原動力であると申されております。

医学、医術の領域に対して、物申す気持は、さらさらございませんが、医事即ち診断、注射、投薬以前に「医事の台」というものが、より大

事なものであることを、私は熊谷文五郎先生の医事の実地、実状、実際から示唆されて居ります。熊谷先生に参りますと、診ていただく前に、もう病気の何割かが差引かれて、心も軽く、気も軽く、楽になった感がいたします。この一事は、決して私一人ではなく、患者の洩れなく共感する気持ではないかと思います。

それは、何人に対しても、相手とひとつになられて、内に於いては、主客の内面的一致が、外に於いては、慈眼、茲語、愛語をもって接せられるからだと思います。

仏教の修証儀に、「愛語というは、衆生を見るに、先ず慈受の心をおこし、顧愛の言語を施すなり。慈念衆生、猶如赤子のおもいを貯えて言語するは愛語なり。徳あるはほむべし。徳なきはあわれむべし。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。

面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を樂しくす。面わずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず。愛語能く廻天の力あるを学すべきなり」と教えて居ります。

熊谷先生は正に仏教を行ずる人、という感慨を深くいたして居ります。求められて一文を終るに当り、これを内にしては、和（主客の内面

的一体）、これを外にしては、礼（和顔、愛語、作法）の熊谷先生に、いつまでも吾が故郷岩手町一方井に居られて、変りなく、医事以前の甘露を垂れ賜わらんことを御願い申し上げて静かにペンを擱かしていただきます。

閉ざされし天の岩戸の
夜長かな

手力男出で来て開け
この夜長

国風を格さん心

下もゆる
(昭和56年6月5日)

御紹介

山本忠壯氏は岩手町出身。昭和2年岩手師範卒。県内各地の小中学校に勤務の後、沼宮内小。一方井中等の校長。岩手町教育長歴任。国語教育、道徳教育においては、県内教育界の第一人者として尊敬されている。また、俳句の研究に精進され、県内俳壇の重鎮である。（編集委）

嗚呼あの頃（その三）

上野精三

（宮門の中に押し込められて）

昭和8年2月1日午前7時50分陸軍歩兵軍曹一兜三六殿に引率せられたる一行12名の地方人が、歩兵第31聯隊の宮門を通過そのまま第2中隊の兵舎に連行せられ、少々意地悪の2人のS持務曹長、お人善しの2人の曹長、善惡混淆の4人の軍曹、伍長、外多数の古兵殿の御世話を受け乍ら背広を軍服に着替の作業に入る。仲々体に合った服は見当らない。その中一兜古参軍曹が大きな声で軍隊では服を体に合せるのでなく、皆体を服に合せるのだ、との達しあり、私

共如何にも感心す。私物で体について居るもの一つもなし。私共の貴重品の保管袋である申又も取り上げられ越中禪に取換えらる。その後私物梱包に約1時間を要す。私物梱包は古兵達が手分けして天幕に包み郵便局へ運んでくれた。微に入り細に入り世話してくれるのは全く軍隊ならではの感ありたり。

しばらく休憩して愈々捕まったなあと云う感じで一服（地方の煙草10本入12銭、軍隊煙草はまれ20本入5銭は酒保で売っているとのことなるも未だ酒保行きの許可なし）しているとまも

なく昼食の時間となり、その日の当番3人で炊事に行くことになったが、炊事が何処か知らないので班付の石川上等兵（胆沢郡前沢町出身）に尋ねたなら今日は自分が案内することと、仲々よく出来た立派な上等兵殿でした。その後の消息不明、恐らく過ぎし支那事変或は大東亜戦争での軍人精神の旺盛な方でしたから名誉戦死を遂げられ靖国神社に祭られて居るやも知れません。昼食は赤飯に尾頭付の魚（鰯）、ほうれんそうのおひたし、沢庵三切れです。石川上等兵殿曰く「今日は皆の入隊を祝して赤飯が出たのである」とのことなり。煮魚で思い出したのは本朝竹○旅館出発の際津軽美人の若い女中さんに、休日には豆腐汁と焼き魚で白い御飯を食べにいらっしゃいと言われたが如何にも軍隊には焼き魚は全くないと言うことが解った次第です。女中さんの親切あらためて感謝した訳でした。

昼食後は色々の物品が交付せらる。服は二装三装の甲、乙略装、演習服、軍靴、脚絆も各種その他色々の品物等数えきれない程です。

この整理に追われ席のあたたまる暇なし。午後3時一人前の兵隊の格好をして兵舎前に集合、中隊長以下の幹部の紹介、古兵との対面式あり、その席にて中隊長鳴海三郎大尉殿より三八式歩兵銃と帶剣（通称牛蒡剣）を厳かに授与せらる。引き続鳴海三郎大尉の訓示あり。（後岩手医専配属将校、御令息は岩手医専卒にて青森県か岩手県にて開業中と思わる）

夕食後夜の点呼、そしてその日の命令会報の伝達あり 1. ○○○○
2. ○○○○
3. 以下12名

以上12名は本日に以て陸軍衛生部幹部候補生に採用せられ陸軍歩兵一等兵階級を与う。以上の様な命令で、つまり本当の実力でなった陸軍歩兵一等兵ではなく仮に星二つつけた一等兵の意味のことです。

私共の班の名称は幹候班と云う名称です。

教官は陸士出の斎藤中尉、父は陸軍少将で余り

軍人臭さのない方で、後年憲兵科に転科された由。助教は前に記した歩兵軍曹一兜三六、助手石川上等兵と云う班です。

命令会報伝達のあと助教より軍隊手帳を交付せらる、その中の軍人に賜わりたる勅諭は幹部候補生は1週間にて暗誦せよとのこと、これには一同閉口、目を白黒させてお互の顔を見合せたり、勅諭の暗誦の先に先づ覚えて損のないのは次の二言なれど時間に逐われ仲々覚えることができない。

これは「一つ軍人は万事要領を本分とすべし」勅諭の暗誦に名案ありと誰かが云い出した。それは便所の中で暗誦するのが一番覚え易いとの事、いざ実施せば臭気が鼻をつく、又余り長く居ると後の方が行列をなし早く出るよう矢の様な催促あり、便所の中もままならず。

免に角一週間で覚えなければ将校になれず衛生伍長となる故皆真剣になって遂に12名一週間で暗誦できた訳です。

暇をみつけて銃の手入、軍靴の手入、軍足の洗濯と目の廻る様な毎日でした。

日中は雪の笹森山の突貫橋突撃森奪取高地と云う名称の雪の中を訓練です。相言葉に血を流すより汗を流せと云う言葉がありました。然し今にして思えばこの訓練程我身にとって尊いものはありませんでした。

訓練、食事、入浴、酒保と毎日の繰り返しです。（うどん一盃3銭、アンピソモチ1ヶ1銭、リソゴ5ヶ3銭）只、アンピソモチは不思議に食べると放屁するので皆に迷惑かかる故つまり悪臭公害の原因となるので別名迷惑饅頭と云われました。

夜の消燈ラッパが「タタタタタテタテターン」と鳴ると封筒状の寝台にもぐる訳です。最初の「タタタタタテタテターン」は「兵隊さんは独り寝るさぞぞ淋しかろう」と聞え、次のタタタタタテタテターンは「将校さんは二人寝るさぞぞ楽しかろう」と聞えました。私達は後の句を聞かないうちに日中の激しい訓練のため深いねむり入り不寝番の見廻りも週番士官の巡視

も何も知らないで熟睡するのです。そして未だうす暗い午前6時あのにくらしい起床ラッパで目をさます訳です。起床ラッパが鳴ったとき秋田県出身（満医大卒）のY君が大きな声であと30分頼むと叫んだが如何共致し方なく起き上った訳です。このにくらしい起床ラッパは「起きろでえ起きろ皆起きろ起きねあど班長さんに叱られる」と響く訳です。辛い苦しい雪の2月の1ヶ月も終りに近づく頃漸く私達も「一つ軍人

は万事要領を本分とすべしを解りかけて来た次第です。

㊭ 当時の一日の主食の量

軍隊は	米4合と麦2合
越後屋旅館（木賃宿）	米3合と麦3合
刑務所	米2合と麦4合
訓練が激しいので一日	6合では足りません。

そのため酒保で補食する習慣です。

第32回医師会野球大会始末記

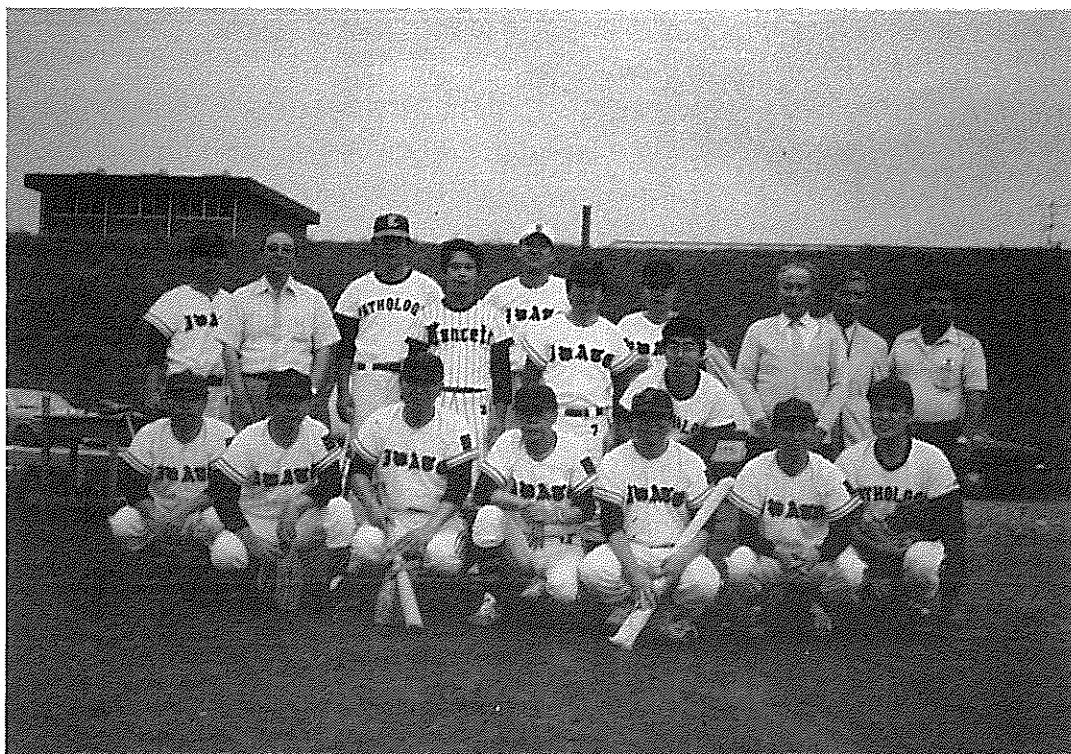
80年8月23日第32回医師会野球大会が紫波郡医師会担当で紫波球場外7球場で行なわれた。夜来の雨で開催が危ぶまれたが、ようやく雨も上がりぬかるみの中で自衛隊ブラスバンドの先導で入場行進が行なわれた。

試合は開会式終了後赤沢小学校グランドで第1回戦、対遠野チームとの試合が行われたが試合は全く一方的で我がチームの打撃練習の如く終始、途中上野会長自ら無条件降伏を勧告する一幕もあり結局19対0で勝利を收め、第2回戦へと駒をすすめた。相手は若手の精銳を優りすぐった釜石チームで好試合が期待された。両軍メンバーを紹介すると

先攻釜石チーム		後攻岩手チーム	
1 中 内 藤	1 二 西 嶋		
2 投 伊 藤	2 右 高 橋 同		
3 三 菅	3 左 本 山		
4 遊 鈴 木	4 遊 中 村		
5 左 半 田	5 投 武 内		
6 一 加 賀 谷	6 一 佐 藤		
7 捕 熊 谷	7 中 佐 々 木		
8 二 藤 沢	8 三 鈴 木		
9 右 斎 藤	9 捕 宮 沢		

我がチームの剛腕本格派武内投手すべり出し好調で一二番を難なくうちとり三番菅に中前安打を許し、又四番鈴木にも中前安打を許したが後続を断ち一回裏我がチーム二死後本山期待

に違わず中前に快打して出塁、ホームラン打者中村に大いに期待が持たれたがこの日どういうわけか全く不調配球の読みを誤ったのか好投手伊藤の前に沈黙無得点で全く互角のまま二回へと進んだ。二回表武内投手絶好調で三者連続三振にうちとり、敵陣宮に岩手チーム恐るべしといった表情がありありと見られた。二回裏、先頭の武内打撃でも大物の片鱗をみせ、中前安打にて出塁好機を迎えたが後続なく無得点試合は漸く白熱の度を加えた。三回表、武内投手の好調つづき三者凡退敵陣宮に焦りの色濃厚となつた。三回裏、先頭打者宮沢打撃妨害で出塁、すかさず二盗我がチーム絶好の先制機を迎えたが、敵投手の巧みなおびき出しにあって二、三星間で抹殺されチャンスの芽をつみとられてしまった。この後二死ながら高橋の右翼越三塁打が出たのであるから惜しみてもあまりある抹殺であった。この回三塁走者高橋を還し得ず無得点、時間的にみて最終回といえる四回の攻防に入った。一死後釜石勢の中にあって攻守走三拍子揃った鈴木が武内の速球を左前に快打脚力を生かして二盗三盗、一死走者三塁というピンチを招いた。しかし武内投手少しもあわてず続く打者を三振にうちとり、次打者は前回軽く三振にしとめた加賀谷の事もあり、この回も抑えてくれるものと信じていた。三塁走者の鈴木もこのままで得点できる見込みはないと判断して一



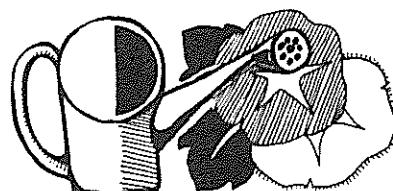
岩手チーム

か八かの勝負に賭けたのであろう誰の目にも無謀と思われる本盗を敵行したのである。そしてこの本盗をみてとった武内投手がボーグを警戒するあまり慎重になりすぎて、投じた一球が高投となり捕手のミットをかすめてバックネット前に転々としている間に鈴木万才しながらホームインし、拾い物の一点を得たのである。痛恨の一球というべきであろうが、この悪投をさそった走者鈴木の果敢な走塁は敵ながら天晴れであった。

四回裏、主砲中村全く振わず、伊藤投手に手取られ武内右飛に倒れ、佐藤に代る一発長打を秘める遠藤も巧みな投球にかわされ三振を喫し無念の涙をのみ1対0で釜石チームの軍門に降ったのである。以上の様に終始押し気味に試合をすすめたが、天我に味方せず敗れはしたが、この試合こそ本大会随一の白熱した名勝負であり、又事実上の決勝戦だったともいえよう。剛腕武内に対する技巧派伊藤、それに特筆すべきは両軍内外野の守りの堅さで両軍失策なし。

又、四死球なしという試合であって、この様な試合は恐らく県医師会野球大会史に例がないのではないかと思われ、如何に充実した試合であったかお判りになると思われる。

この試合でわが岩手チームは、次期大会では各チームにマークされることと思われるが、今度の大会には優勝を目指して健斗されることを期待してやまない。 (近藤記)

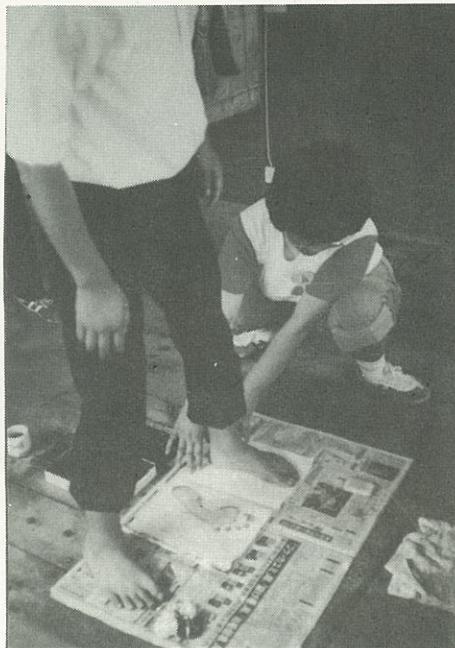


足プリント法による足痕採取のスナップ写真

本年5月上野郡医師会長より各町村の教育長、小中学校長及び養護教諭に足痕採取（足プリント法）の協力方をお願いしておりました所、全岩手郡下の各町村に100%の協力を得て、7月

20日現在資料が続々と集り、すでに3,000枚以上に達し更に集りつつあります。

今日はその時のスナップ写真を掲載します。



採取風景

追記

第33回大会は北上医師会担当で8月23日北上市で行なわれることが決定されました。今度の試合運営には我が方には関係ないと思われるが敗者復活戦もあるとのことですから、必ず2試合やらなければならなくなります。選手諸兄は日頃より充分なスタミナをつけて下さい。尚、試合終了後の選手懇親会には是非出席になられ試合のこと、次回の作戦、又あすからのことなど懇談なされることをお願いします。

(宮杜)

編集後記

長かった寒い入梅も終りようやく夏らしい強い日の光が照りつけ、氷屋の店先には人々が集まり風鈴の音もこころよく感じられるようになりました。農家の人々もこれならば何とかなりそうだと安堵している様子です。

今日は山本忠壮氏の原稿を戴きました。文中修澄義の一節を示されて居りますが自己中心の世情の中で我々は患者に対して常に満足な慈眼、慈語、愛語を持って接しているだろうか。又、患者ばかりでなく家族の信頼をも得ているだろうか。

武見会長は“病気の経験によって得た知識が健康時の健康養護というものと合体して、病人の全体像を描くことに努力が向けられた”と云っております。医の道はいよいよむづかしいと感じます。

(M)